

201317011A

厚生労働科学研究費補助金  
障害者対策総合研究事業

発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいた  
レジリエンス向上に関する研究

課題番号 H24-身体・知的-一般-007

平成 25 年度 総括・分担研究報告書

平成 26 年 (2014) 年 3 月

研究代表者 稲垣真澄

厚生労働科学研究費補助金  
障害者対策総合研究事業

発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいた  
レジリエンス向上に関する研究

課題番号 H24-身体・知的-一般-007

平成 25 年度 総括・分担研究報告書

平成 26 年 (2014) 年 3 月

研究代表者 稲垣 真澄

## 目 次

### I. 総括研究報告

発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究 稲垣真澄（研究代表者）	-----1
--	--------

### II. 分担研究報告

1. 発達障害児・者をもつ母親の養育レジリエンスの構成要素に関する質的研究 稲垣真澄	-----7
2. 注意欠陥多動性障害（ADHD）児と家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に 関する研究 山下裕史朗	-----19
3. 親へのガイダンスグループを通しての親の養育態度の変化：予備的研究 渡部京太	-----23

III. 研究成果の刊行に関する一覧表	-----49
---------------------	---------

IV. 研究成果の刊行物・別刷	-----51
-----------------	---------

# I. 総括研究報告

発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいた  
レジリエンス向上に関する研究

稲垣真澄

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）

総括研究報告書

発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究

研究代表者 稲垣真澄

独) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部 部長

研究要旨

乳幼児期から成人期の発達障害児者を支援するためには、子ども及び子どもに関わる環境を含めたアセスメントが必要である。本研究は、様々なタイプの発達障害の保護者の支援ニーズを元に、保護者のレジリエンスすなわち「困難な状況においても克服できる力」を評価し、子どもの行動、レジリエンス、養育行動の関係を明らかにすること、さらに、母親のレジリエンスを向上させる要因を検討することを目的として行った。二年度には①発達障害児を持つ母親 23 名への面接調査を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた質的分析を行い、②注意欠陥／多動性障害（ADHD）児の母親レジリエンス向上要因分析、そして③ADHD 児や広汎性発達障害（PDD）児を持つ保護者への親ガイダンスグループの効果分析を行った。その結果、保護者レジリエンスは 5 つのカテゴリすなわち、①親意識、②自己効力感、③特徴理解、④社会的支援、⑤見通し、で構成される養育レジリエンスのモデルが想定できた。また、児や保護者のニーズに則った医療・保健・福祉サービスが重要であることが示唆され、ADHD 児の保護者はサマートリートメントで気分、感情が改善すること、発達障害保護者会も一定の効果をもたらすことが判明した。最終年度に向けては、多数の保護者について質問紙調査を進めてレジリエンス評価尺度の定量化を図り、上記介入の有効性について客観的な検討を進めていきたい。

研究分担者

山下裕史朗 久留米大学医学部小児科  
教授

渡部京太

国立国際医療研究センター国府台病院児童  
精神科 医長

巻く環境を含めた介入を考えるべきである。例えば、注意・欠如多動性障害（ADHD）に対しては、薬物療法のみではなく、環境調整やペアレントトレーニングなどの家族に働きかけることが治療効果の向上につながる事が重要であり、養育者自身も環境要因からの影響を受けて変化・成長していくものと考えられる。

A. 研究目的

発達障害児者支援のためには、児を取り

そこで、本研究班では発達障害児とその

母親を環境も含めて評価する総合アセスメントツールを提案し、好ましい環境因子を構築したいと考えてスタートした。

発達障害児の母親機能や環境要因を評価する指標はほとんど報告されていない。そこで本研究では、家族環境要因を評価する指標と支援ニーズを提案することからはじめることを考えた。発達障害児のサインから養育者は子育てに困難さを感じる人が多い。その困難さを養育者はストレスと感じ、不適切な養育行動に至ることもある。したがって、支援者は困難性を克服する能力（レジリエンス）を保護者、とくに母親において向上させるように介入していくことが重要と考える。そこで初年度は、医療機関に所属する支援者すなわち医師やコメディカルを対象としたインタビュー調査を行い、質的解析を行った。二年度目には発達障害児・者をもつ母親に半構造化面接を行い、乳幼児期から現在までの子育てについて聴き取りを行った。

また注意欠陥多動性障害（ADHD）児を持つ母親の障害受容、養育態度に関する調査を通じて、ADHD児と家族のレジリエンス向上の鍵を握る因子について検討した。そしてADHD児あるいはPDD児を持つ保護者の体験談を聴取することにより、保護者会の果たす役割について検討し、レジリエンス向上に関しての検討を行った。

## B. 研究方法

### 1) 保護者への面接調査

研究代表者ならびに研究分担者の所属する医療機関に通院中、あるいは通院していた16歳以上の自閉症スペクトラム障害者をもつ母親23名に、幼小児期から成人期に

至るまでの子どもに関わる様々な問題に対応してきた経験を聴取した。母親の平均年齢は $50.3 \pm 5.0$ 歳で、42～62歳に分布した。2012年10月～2013年3月の6ヶ月間に母親に対する半構造化面接を行った、面接は分析者及びスーパーバイザーのうち2名で実施した。面接者に主治医は含まれなかった。音声は、ICレコーダーで記録し、文字起こしの後、記録は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）によって分析された。

また、本研究の内容は、倫理委員会で審査を受けて、承認された。なお面接前に、本研究の目的について説明を行い、ICレコーダーで音声を記録することの同意を得た。

### 2) ADHD児に対するサマートリートメント（STP）の保護者への効果

2009～12年にくるめSTPに参加した小学校2～6年の子どもとその保護者で、子どもには、「小学生版 Kid-KINDL 小学生版 QOL 尺度」、保護者（すべて母親）には、「親版 Kid-KINDL」ADHD Rating Scale (RS)、日本版 POMS 短縮版を用いた。POMS は、「緊張」「抑うつ」「怒り」「活気」「疲労」「混乱」の6つの尺度から気分や感情の状態を測定するものであった。

### 3) 保護者への親ガイダンスグループの効果分析

国府台病院児童精神科に通院中でなんらかの二次障害を抱えている、中学生から18歳までのADHDやPDDの子どもを持つ保護者を対象に、①ADHDやPDDの思春期、青年期、成人期の経過や直面する発達課題についての情報を提供すること、②活用で

きる社会資源、社会福祉のサービスに関する情報を提供すること、③ADHD や PDD の青年、成人に自分自身の進路選択の体験談を聞くこと、④ADHD や PDD の子どもを持つ保護者に子どもの進路選択に際してどのようなことを考えたのかという体験談を聞くことを目的にプログラムを構成した。

## C. 結果

### 1) 保護者への面接調査

MGTA により、保護者思考過程として 5 つのカテゴリすなわち、①親意識、②自己効力感、③特徴理解、④社会的支援、⑤見通し、で構成される養育レジリエンスのモデルが想定できた。発達障害児・者の養育において、母親は親意識と自己効力感によって動機づけられ、子どもの特徴理解を踏まえて対応策を考えて社会的支援を活用し、子どもの特徴や社会的支援に基づき成り行きを見通すことで子どもを取り巻く問題に対する適切な対処を導き出していると考えた。

### 2) ADHD 児に対するサマートリートメント (STP) の保護者への効果

STP 参加後の変化として親 QOL 得点は、身体的健康で有意に得点が増加し、総得点、自尊感情で増加傾向差を認めた。精神的健康、家族、友達、学校生活では有意な変化は認めなかった。子ども QOL では、総得点、精神的健康、家族、友達の領域で有意に得点が増加していた。

QOL 尺度の親子の差異を STP 参加前、参加後、3 か月後で検討したところ、一貫して学校生活尺度で子ども QOL よりも親 QOL 得点が有意に高く、STP 参加後では家

族尺度で、子ども QOL 得点よりも親 QOL 得点が有意に低かった。

親子ともに自尊感情の得点が他の領域に比べて低かった。母親の POMS は、全ての領域で STP 参加後、POMS 得点が低下した。活気尺度は増加した。母親の POMS の 1 項目でも 75 点以上の要治療群の母親が 9 名いて、STP 後に全ての領域で POMS 得点の低下、活気の増加が認められた。

### 3) 保護者への親ガイダンスグループの効果分析

会では、発達障害の子どもを持つ保護者同士で話す機会が少ないため、お互いに情報や意見を交換することで、自分一人が悩んでいるのではないという安心感が得られたようであった。“ADHD 保護者会”では、不登校の問題を抱える保護者を他の保護者が懸命に支えようとする姿が目立った。

一方“PDD 保護者会”では、「活用できる精神保健サービス」「活用できる地域資源」のレクチャーへの関心が ADHD の保護者と比べて強かった。“ADHD 保護者会”では不登校の問題の話題から、そして“PDD 保護者会”では不登校の問題に加え、「活用できる精神保健サービス」「活用できる地域資源」といった話題から、保護者の発言が活発になり、グループの凝集性が高まっていった。

## D. 考察

保護者 23 名への面接調査では〔養育困難にも関わらず、子どもを取り巻く問題を適切に対処する思考過程〕を分析テーマとして、【親意識】、【自己効力感】、【特徴理解】、【社会的支援】、【見通し】のカテゴリを含

むモデルを最終的に提案できた。成人対象のレジリエンス構成要素を検討した先行研究ではレジリエンスの構成要素をソーシャルサポート（社会的支援）、自己効力感、社会性としている。したがって今回の【自己効力感】と【社会的支援】は他のレジリエンス研究での構成要素に共通する部分があると考えられる。

一方【親意識】と【特徴理解】は発達障害児・者を養育する立場である母親特有の構成要素であると考えられる。Bayat は自閉症児の家族レジリエンスのカテゴリとして【家族が団結すること】、【苦難以外の意味づけを行うこと】、【世界観を変えること】、【強みを肯定し、障害の困難さを共有すること】、【宗教的な体験と信仰】を上げている。このうち【世界観を変えること】や【強みを肯定し、障害の困難さを共有すること】は子どもの特徴を理解することで達成されるものと考えられ、今回の検討の【特徴理解】に関連していると想定される。

M-GTA によって得られた結果は分析に用いるデータの範囲内に限定して解釈した仮説的なものであり、木下が述べるように、社会に還元され、実際の問題に適用される中で検証されるべきである。すなわち現段階では発達障害児・者をもつ母親の養育レジリエンスの構成要素は、本研究の分析対象内で限定して解釈された仮説であり、今後、医師を含む支援者が実践の中で活用し、検証することが必要である。さらに仮説をより一般的な理論として提示するには、本研究の結果を裏打ちするような定量的データ解析を含めた検討が今後進められるべきと考えられ、最終年度は量的研究を目指したい。

サマートリートメント（STP）前後の子どもの行動変化や QOL の評価は常に客観的なものではなく、評価者（親）の精神状態が反映されることも示唆されている。

QOL 尺度からみた子ども自身による STP 評価は良く、親による評価より高い結果となっている。以上のことから、STP は子ども、親共に効果は認められが、子どもの評価と親による評価の差異について理論的な枠組みも含め検討が必要と思われる。

また、発達障害児の保護者会の効果を測定するために、①家族の自信度評価票、②子どもの行動チェックリスト（CBCL）、③ Family Diagnostic Test（FDT）、④保護者の抑うつ尺度等を行ってきているが、これらのチェックリストでは保護者会の個人別効果を測定するのは困難である。発達障害児の母親のレジリエンスを評価できる母親援助資源尺度は、親ガイダンスグループの効果を測定するのに有用と期待される。本研究の3年目には、引き続き親ガイダンスグループを行い、介入前後の母親支援資源尺度を付けることにより、親ガイダンスグループの効果測定を試みたいと考えている。

## E. 結論

研究二年度において、保護者面接調査を実施し、質的分析によって発達障害児の母親における適応過程を明らかにした。また、STP 前後の親の評価による ADHD-RS、親の気分、感情、QOL 尺度から見た STP の評価と親のレジリエンスとの関係を明確にする必要がある。そして、保護者会では、発達障害を持つ子どもの保護者同士で話す機会が少ないため、お互いに情報や意見を交換することで、自分一人が悩んでいるの



ではないという安心感が得られたようであった。最終年度には、親ガイダンスグループを継続して行い、介入前後の母親支援資源尺度評価により、親ガイダンスグループの効果測定を試みることも必要である。

#### F. 健康危険情報

特記事項無し

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

- 1) Suzuki K, Kobayashi T, Moriyama K, Kaga M, Inagaki M. A framework for resilience research in parents of children with developmental disorders. *Asian Journal of Human Services* 2013; 5: 104-111.
- 2) 鈴木浩太, 北 洋輔, 加我牧子, 三砂ちづる, 竹原健二, 稲垣真澄. 子どもの行動特性と母親の抑うつ傾向の関連性: 母性意識の効果について. *小児保健研究* 2013 ; 第 5 巻, pp. 363-368.
- 3) 稲垣真澄, 小林朋佳, 安村 明. ADHD や自閉症の評価方法. *小児科診療* 2013 ; 第 76 巻, pp. 369-374.
- 4) 山下裕史朗. 子どものレジリエンスを高める. *チャイルドヘルス* 2013 ; 16 (4) : 218.
- 5) 渡部京太. 子どもの不安障害特集: 現在の児童精神科臨床における標準的診療指針を目指して). *児童青年精神医学とその近接領域* 2013 ; 第 54 巻第 2 号 : pp. 148-158.
- 6) 渡部京太. グループに求めることー児童精神科病棟の子どもの変化からみえてくることー. *集団精神療法* 2013 ; 29 (2) : pp. 244-250.
- 7) 渡部京太. 成人期 ADHD における併存と鑑別 (特集:おとなの ADHD 臨床 I). *精神科治療学* 2013;第 28 巻 2 号:pp. 147-154.
- 8) 渡部京太. 不安障害のある思春期・成人期の自閉症スペクトラム障害の薬物療法と包括的治療 (特集:思春期・成人期の自閉症スペクトラム障害の薬物療法). *臨床精神薬理* 2013;第 16 巻 3 号:pp. 333-344.

##### 2. 学会発表

- 1) 小林朋佳, 稲垣真澄, 鈴木浩太, 森山花鈴, 加我牧子: 発達障害診療に必要な保護者支援に関する調査: 医師と保護者の特性に関する検討. 第55回日本小児神経学会学術集会, 大分, 2013.5.30-6.1.
- 2) 鈴木浩太, 北 洋輔, 加我牧子, 三砂ちづる, 竹原健二, 稲垣真澄: 7歳6ヶ月から9歳の子どもの行動特性の発達の變化に母親の療育行動が及ぼす影響. 第55回日本小児神経学会学術集会, 大分, 2013.5.30-6.1.
- 3) 渡部京太: グループに何を求めるか グループに求めることー児童精神科病棟の子どもの変化からみえてくること. 日本集団精神学会第30回大会, 長野, 2013.3.16-17.
- 4) 渡部京太: 子どもの育ちをめぐる地域集団と治療的集団ー学童保育の今日的意義ー子どもを見つけだすこと、そしてグループを信じられる経験を提供すること. 日本児童青年精神医学会第54回大会, 札幌, 2013.10.10-12.

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得           なし

2. 実用新案登録   なし

3. その他           なし

## Ⅱ. 分担研究報告

1. 発達障害児・者をもつ母親の養育レジリエンスの  
構成要素に関する質的研究

稲垣真澄

厚生労働科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）

分担研究報告書

発達障害児・者をもつ母親の養育レジリエンスの構成要素に関する質的研究

研究分担者 稲垣真澄

独) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部 部長

研究要旨

発達障害児・者をもつ母親において、養育困難があるにも関わらず、良好に適応する思考過程を養育レジリエンスと考へて、その構成要素を明らかにすることを目的とし、16歳以上の発達障害児・者をもつ母親23名に半構造化面接を行い、乳幼児期から現在までの子育てについて聴き取りを行った。そして、音声データから得られた逐語記録を元に修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて質的に分析した。

その結果、5つのカテゴリー、すなわち、①親意識、②自己効力感、③特徴理解、④社会的支援、⑤見通し、で構成される養育レジリエンスのモデルが想定できた。発達障害児・者の養育において、母親は親意識と自己効力感によって動機づけられ、子どもの特徴理解を踏まえて対応策を考え、社会的支援を活用し、子どもの特徴や社会的支援に基づき成り行きを見通すことで、子どもを取り巻く問題に対する適切な対処を導き出していると考えた。

理論の一般化には更なる検討が必要であるものの、養育レジリエンスの概念を通して発達障害児・者をもつ母親を理解することが、発達障害の医学支援に欠かせない視点になり得ると考えられる。

A. 研究目的

発達障害児・者をもつ保護者は日々の子育てを通じてストレスを感じ、抑うつ度が高まることが報告されている<sup>1), 2)</sup>。つまり、発達障害児・者をもつ保護者は、子どもの発達障害特性に関連した養育上の困難によって精神的健康が悪化する可能性が高い状況に置かれている。保護者の精神的健康は養育行動に関連し<sup>3)</sup>、その養育行動は子どもに影響を与えることが指摘されている<sup>4)</sup>。したがって、発達障害に対する医学支援に

おいては、対象児本人への診断・治療にとどまらず、保護者自身を良好に適応させるような助言や支援がなされるべきである。

一方、精神的健康を著しく悪化させる状況や環境に関わらず、良好に適応する過程を表す概念として、「レジリエンス」が知られている<sup>5)</sup>。したがって、発達障害児・者に対する養育上のレジリエンス（養育レジリエンス）の概念を明確化すると、保護者に対する支援につながり、さらに発達障害児・者の診療が充実するものと予想される。

発達障害領域の先行研究では、家族単位で捉える家族レジリエンスの概念<sup>6)</sup>、<sup>7)</sup>を適用し、その構造を検討しているものがある<sup>8)</sup>。しかし、子どもの問題行動が精神的健康に与える影響は、父親よりも母親の方が大きいこと<sup>9)</sup>から、主たる養育者となることが多い母親に着目した検討も必要と考えられる。そこで、本研究では、発達障害児・者を養育している母親に焦点を絞り、養育レジリエンスを「養育困難があるにも関わらず、良好に適応する過程」<sup>10)</sup>と定義した。そして、母親との面接から得られた発言データを元に、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (modified grounded theory approach: M-GTA)<sup>11)</sup>、<sup>12)</sup>を用いて養育レジリエンスの構成要素を質的に検討することを目的とした。

## B. 研究方法

### 1) 対象

本研究は、厚生労働科学研究費補助金「発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究」の一環として行われた。対象は、研究代表者ならびに研究分担者の所属する医療機関に通院中、あるいは通院していた16歳以上の自閉症スペクトラム障害者をもつ母親23名であった。思春期以降の発達障害児・者に限定した理由は、幼小児期から成人期に至るまでの子どもに関わる様々な問題に対応してきた経験を、母親が豊富に語る事ができると判断したためである。対象の母親の平均年齢は50.3±5.0歳で、42～62歳に分布した。面接時点で、配偶者（つまり、発達障害児・者の父親）と離別している者が2名（8.7%）いた。また、ほぼ全例（22名）

に対象児以外に子どもを有していた。対象となる子どもの年齢は21.8±3.6歳（16～31歳）であり、男性18名（78.3%）、女性5名（21.7%）であった。学習障害を併存する者が2名（8.7%）含まれた。

### 2) 分析者及びスーパーバイザー

心理学を専攻し、博士号を取得した研究員（筆頭著者）を分析者とした。分析のスーパーバイザーは、小児神経科医2名と研究員（非医師）1名が務めた。

### 3) データ取得

2012年10月～2013年3月の6ヶ月間に母親に対する半構造化面接を行った。面接は、分析者及びスーパーバイザーのうち2名で実施した。面接者に主治医は含まれなかった。面接前に、各発達段階（生後1年間、就学前、小学校低学年、高学年、中学校、高等学校、大学・専門学校等、現在）における子育ての様子を母親に記載することを要請し、その情報に基づいて子どもや支援者との関わりについて詳細に聴き取りを行った。音声は、ICレコーダーで記録した。面接実施後、音声データを文字に変換し、逐語記録を作成した。面接時間は、1～2時間程度であった。

### 4) 分析方法

逐語記録は録音内容と完全に一致していることを、面接者2名と面接に立ち会わなかった1名が少なくとも4回確認して、正確性を担保した。本記録は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) によって分析された<sup>11)</sup>、<sup>12)</sup>。M-GTAはGlaserとStraussによって考案されたグラ

ウンデッド・セオリー・アプローチを木下<sup>12)</sup>が活用しやすいように修正したものである。M-GTAの分析法に則り、逐語記録の切片化を行わずオープンコーディングで概念を生成した。つまり、逐語記録を読みながら分析テーマに関連がありそうな部分に着目し、それを一つの具体例とする概念を生成した。概念は、概念名、定義、具体例により構成された。概念の妥当性は、具体例が豊富にあること、概念間や概念内の具体例間で比較検討することで保障されると考えた。また、類似した概念を1つのカテゴリとしてまとめ、ストーリーラインを作成していく方法を取った。

#### 5) 倫理的配慮

本研究は、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会で審査を受けて承認された(倫理委員会承認番号A2012-006)。面接者は、対象の母親に対して本研究の目的について口頭で説明し、書面による同意を得た後に半構造化面接を行った。

#### C. 研究結果

分析テーマを〔 〕、カテゴリを【 】, 概念を〈 〉、具体例を「 」内に示した。具体例は、相づちや間の省略、方言を標準語に変更することなど、内容が損なわれない程度に修正を加えた。また、具体例の意味が伝わるように、補足した文章を( )内に表記した。

#### 1) 分析経過

分析テーマは分析がしやすいように調整したテーマであり、分析をしながら分析テーマの絞り込みを行った。まず、定義であ

る〔養育困難にも関わらず、良好に適応する動的過程〕を分析テーマとし、分析を実施し、概念を生成した。その結果、この分析テーマには思考や行動が含まれており、特に、行動の種類は多様であり、理論を生成することが困難であった。そこで、行動に至る前の思考に限定することとした。また、良好な適応をより具体的な状態として定義するべきであると考えられたため、良好な適応が子どもを取り巻く問題を適切に対処している状態であると想定した。

以上のことから、分析テーマを〔養育困難にも関わらず、子どもを取り巻く問題を適切に対処する思考過程〕に絞り込んだ。そして、この過程から外れた場合には、抑うつ度、ストレスなどが増大し、円滑に過程が進み適切な行動に至った場合には、これらの感情が軽減されるものと仮定した。

まず、23名中3名の逐語記録を、〔養育困難にも関わらず、子どもを取り巻く問題を適切に対処する思考過程〕の観点で分析した結果、11概念が生成された。逐語記録データを追加していき、9名分のデータを追加分析した段階で、13概念が生成された。この時点で、以下の5つのカテゴリを生成し、ストーリーラインを検討した。すなわち、【子育て意識】、【特性理解】、【社会資源の認知】、【見通し】、【行動力】のカテゴリを、当初は想定した。

その後スーパーバイズを受けながら、概念及びカテゴリの構成とストーリーラインを修正し、解析を進めた。21名の解析が終了した段階では、表1に示すような12概念による【親意識】、【自己効力感】、【特徴理解】、【社会的支援】、【見通し】の5つのカテゴリで構成されるモデルが生成された

(図 1)。また、2名の逐語記録の解析を追加した上で、概念の追加やカテゴリの変更がなされなかったため、本モデルは理論的飽和化がなされたと考えた。

## 2) 生成されたカテゴリ及び概念について

### ①【親意識】と【自己効力感】

子どもを取り巻く問題を解決するための行動を起こすには、動機づけが必要となる。

【親意識】と【自己効力感】には、その動機づけとなる要素が含まれている。【親意識】は、〈親としての自覚〉、〈子どものがんばりの認知〉、〈子どもとの連帯感〉の3概念で構成された。〈親としての自覚〉は、「その自立をしてほしいっていうのが、私の母親像だったんですね。…子どもが生まれた時に、私はあと22年、この子のために頑張らなあかんと思ったぐらいに、責任感って、すごく強かったもので。」などから生成され、子どもの親であると自覚することで、主体的に子育てに取り組むことができるようになることを表すものである。〈子どものがんばりの認知〉には、「…私も辛かったんですけど。本人が、やっぱり、もっと辛かったのかなとか、思いまして…」などが含まれる。母親と同じように、または、それ以上に子どもが苦勞しているということを想像できることが、母親が養育のために労力を費やせる要因の一つであると推察される。

〈子どもとの連帯感〉は、面接者の「(子育てに)前向きな理由はなんですか？」という問いに、「私は(絵が)下手なんです。絵が描けないんですけど。(対象児が)教えてくれたりするんですね。」と母親が答えたことから生成された。つまり、母親は子どもと関わりをもつことが重要であると考えて

おり、その関わりから生まれる連帯感が子育てに前向きになることにつながると解釈した。

【自己効力感】を構成する概念は、〈自己効力感〉のみであった。〈自己効力感〉には、「自閉症だけでも、まあ、ここまで(できるように)なったかなっていうことで」のように、過去の子育てを振り返り、母親自身の子育ての効果があつたと思うことや、「…(座って作業することが)できる訳がないって思ってたんですが、(支援者の指導の効果もあって)半年すると座って作業ができるようになってたんですよ。…私、やらせてなかったなっていうのは思って。」のように、他者が子どもの行動を改善するのを目の当たりにして、自身もできることがあると母親が考えることが含まれる。

### ②【特徴理解】、【社会的支援】、【見通し】

【特徴理解】、【社会的支援】、【見通し】は、“適切な対処”の判断をするために、活用される資源となるものである。【特徴理解】は、〈障害の認識〉、〈子どもの特徴理解〉、〈発達障害に関する知識〉の3概念で構成される。〈障害の認識〉には、「先生、うちの子はなんなんですかって言ったら、…自閉症ですっておっしゃったんです。この自閉症の三文字で、あの、いい意味で、180度、私の中で、変わりました。」などが含まれる。〈子どもの特徴理解〉には、「5、6年の時がね、本人が、もう、他のお友達と、同じようなことをすることについていけなかな、っていうのも思いましたし。」などが含まれる。〈発達障害に関する知識〉には、「その色々、調べると、…この子の場合、…理論立ててしっかり言わないと、(伝わらない)」がある。具体例からも明らかかなよう

に、〈障害の認知〉、〈発達障害に関する知識〉、〈子どもの特徴理解〉は、順に、診断名、一般的な発達障害の知識、その子自身の状態や特徴として区別することができる。

【社会的支援】には、〈聴き手の認知〉、〈支援者の認知〉、〈無理解者の認容〉が含まれる。〈聴き手の認知〉には、「学校のママ友さんたちには分かってもらえない悩みが、こっち（同じ療育サービスを受ける母親たち）だったら、…分かってもらえる…精神的にとっても支えになったと思います」がある。〈支援者の認知〉は、「たくさんの人に助けていただいた。やはり、その、一人ではなんでもできないので、もう、本当に、つながっていくことの大切さというのは、ですね」などによって生成されている。

社会的支援は、情緒的支援（共感や愛情、信頼）と手段的支援（形のある援助やサービス）に分類されることがある<sup>13)</sup>。〈聴き手の認知〉は情緒的支援に、〈支援者の認知〉は手段的支援に関連するものであると想定される。また、聴き手と支援者は異なる人とは限らず、同一人物が聴き手と支援者の役割を担うこともあった。

他方、子育てにおいて必ずしもすべての人が母親に協力し、好ましい効果を与えるとは限らない。そこで、〈無理解者の認容〉と名付けた概念は、「主人も、…発達障害者で、…むきになると、癩癩起こすみたいな感じで、頼りになるっていう人ではなかったです」、「…（ある教員が発達障害を理解することは）、無理だろうっていうことを（周囲の関係者が）おっしゃいましたので、すぐに退職ということで、（一時的に我慢すればよいと思いました。）」が含まれる。つまり、父親、親族、学校の教員は〈聴き

手の認知〉や〈支援者の認知〉の対象となることも当然ありうるが、人によっては協力を期待し続けるよりも、無理解者として扱う方が母親の精神的健康には良いのであろう、と推測できる。

【見通し】は、将来の状況を予測するために、【特徴理解】と【社会的支援】を発展させたものとして生成された。「…（実家から離れて就職することを）やるだけやるんだろうなあって。…（職場で失敗して）帰ってくるんだろうなあ（というように）どっかで覚悟していたので」という具体例から生成された〈子どもについての予測〉と、「高校は、…私立にしようと思ったので。…（私立は先生の移動が少ないので）一回相談（すれば）、その先生が、ずっと（子どものことを）分かってくれる。で、公立は、どんなにいい先生でも動いてしまうことがありますし。」という具体例から生成された〈環境の予測〉が含まれる。すなわち、子ども自身の行動や取り囲む環境の変化を予測できることで、問題が生じた時に必要以上に悩まずに適切な行動できることにつながると想定される。

### 3) ストーリーラインと結果図

図1に結果図を示す。【親意識】や【自己効力感】は、子どもを取り巻く問題を解決するための動機づけとなるものである。そして、子どもを取り巻く問題が生じた場合には、【特徴理解】、【社会的支援】、【見通し】を活用して、適切な対処を選択する過程が示された。また、このような過程から外れた場合や円滑に進まなかった場合には、子どもを取り巻く問題を円滑に対処することができず、抑うつ度やストレスが高まると



考えると理解しやすい。

#### D. 考察

本研究では、〔養育困難にも関わらず、子どもを取り巻く問題を適切に対処する思考過程〕を分析テーマとして、【親意識】、【自己効力感】、【特徴理解】、【社会的支援】、【見通し】のカテゴリを含むモデルを最終的に提案した。成人を対象にして、レジリエンスの構成要素を検討した先行研究では、レジリエンスの構成要素を、ソーシャルサポート（社会的支援）、自己効力感、社会性としている<sup>14)</sup>。したがって、今回の【自己効力感】と【社会的支援】は、他のレジリエンス研究での構成要素に共通する部分があると考えられる。

また、Antnovsky<sup>15)</sup>が述べるような首尾一貫感覚（sense of coherence: SOC）も、過酷な状況において精神的健康を維持している人の要因として生成された概念であり、レジリエンス概念と類似している。SOCには、世界（生活世界）を予測可能で、把握可能なものとしてみる見方という要素が含まれる<sup>15)</sup>。今回のカテゴリである【見通し】は、子どもの行動や環境を予測できることを表すものであるため、SOCと関連性があるものと想定される。

一方、【親意識】と【特徴理解】は、発達障害児・者を養育する立場である母親特有の構成要素であると考えられる。Bayat<sup>8)</sup>は、自閉症児の家族レジリエンスのカテゴリとして、【家族が団結すること】、【苦難以外の意味づけを行うこと】、【世界観を変えること】、【強みを肯定し、障害の困難さを共有すること】、【宗教的な体験と信仰】を上げている。そのうち【家族が団結するこ

と】については、本研究では母親のみを対象としたレジリエンスを検討したため、判定ができない。また、文化的な背景の違いから、神や宗教についての語りは本研究対象からは得られなかった。【苦難以外の意味づけを行うこと】には、子どもの障害を肯定的に捉えることが含まれ、本研究から得られた概念の一つである（子どもとの連帯感）は、子どもとの関わりを肯定的に捉えることに関係するので、【親意識】は、Bayat<sup>8)</sup>の指摘する【苦難以外の意味づけを行うこと】に関係したものであると考えられる。また、【世界観を変えること】や【強みを肯定し、障害の困難さを共有すること】は、子どもの特徴を理解することで達成されるものと考えられるので、本研究の【特徴理解】に関連していると想定される。

以上のように、本研究で仮定したモデルにおけるカテゴリや概念は、研究対象や定義・方法から想定される相違がみられるものの、他のレジリエンスの構成要素や類似した概念と共通する部分が多いものであった。また、スーパーバイザーとの議論を重ねながら、発達障害児・者の母親に適用するために定義や分析テーマを適宜修正したことや、発達障害領域の家族レジリエンス構成要素も充分配慮したカテゴリとなっている点からも、本モデルは、発達障害児・者の母親に対応したレジリエンスの一つとなっているものと推察される。この養育レジリエンスの概念を通して母親を理解することが、日常臨床における母親に対する助言や支援の際に有用な視点になると考えられる。

発達障害児・者を養育する母親が抱く感情や認知、思考様式についての研究では、

これまで、「障害受容」についても注目されてきた<sup>16)</sup>。この心理過程は、段階的な経過であるとする説もあるが、一度、障害を受容した親でも、後になって子どもの障害を認めたくない気持ちや、障害に対する負の感情が再燃する慢性的悲哀という概念を含む考え方もある<sup>16)</sup>、<sup>17)</sup>。本研究対象の母親の一人から発せられた「おなかにいる時からやり直したいですね。また、ちょっと、違う子になっているかも。」という語りは、発達障害がある子どもの存在を認めたくない感情を表すものであると推察され、慢性的悲哀という解釈をしてもよいかもしれない。他方、この母親の面接データから、子どもに適切な対応をしていることが推察され、養育レジリエンスが高い母親であることも判断できた。そこで、本研究で提案する養育レジリエンスは、障害受容とは独立するものであると考えられる。Olshansky<sup>17)</sup>は、慢性的悲哀が養育困難に適応するための自然な反応であるにも関わらず、母親が慢性的悲哀を表すと、支援者の中には、無理に受容させようと介入する者もいることを指摘している。これらのことから、養育レジリエンスという枠組みを用いて発達障害児・者の母親を理解することで、障害受容とは異なる側面で母親の状態を捉えることができ、支援者が母親について慎重に把握できるようになるとも考えられる。

最後に、本研究の限界について以下のようによまどめたい。今回は個別面接に基づいたため、母親の振り返りによってデータを収集している。乳幼児期のエピソードなど記憶があいまいになっている可能性や、現在とは異なる時代背景であることは本研究の結果を解釈する上で考慮しなければなら

ない。そして、今回の分析ならびにスーパーバイズは小児神経科医2名と非医師の2名によるものであり、極めて限定的な状況が本研究の分析に大きな影響を与えている可能性は否定できない。また、M-GTAによって得られた結果は、分析に用いるデータの範囲内に限定して解釈した仮説的なものであり、木下が述べるように、社会に還元され、実際の問題に適用される中で検証されるべきである<sup>12)</sup>。すなわち、現段階では、発達障害児・者をもつ母親の養育レジリエンスの構成要素は、本研究の分析対象内で限定して解釈された仮説であり、今後、医師を含む支援者が実践の中で活用し、検証することが必要である。さらに、仮説をより一般的な理論として提示するには、本研究の結果を裏打ちするような定量的データ解析を含めた検討が今後進められるべきと考えられる。

## E. 結論

発達障害児・者をもつ母親における養育レジリエンスの構成要素を明らかにすることを目的とし、16歳以上の発達障害児・者をもつ母親23名に半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて質的に分析した。①親意識、②自己効力感、③特徴理解、④社会的支援、⑤見通し、で構成される養育レジリエンスのモデルが想定できたが、理論の一般化には更なる検討すなわち量的な解析が今後必要と考えた。

研究協力者（所属）

鈴木浩太，森山花鈴，小林朋佳：国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所

参考文献

- 1) Koegel RL, Schreibman L, Loos LM, et al. Consistent stress profiles in mothers of children with autism. *J Autism Dev Disord* 1992; 22: 205-216.
- 2) Breen MJ, Barkley RA. Child psychopathology and parenting stress in girls and boys having attention deficit disorder with hyperactivity. *J Pediatr Psychol* 1988; 13: 265-280.
- 3) Lovejoy MC, Graczyk PA, O'Hare E, Neuman G. Maternal depression and parenting behavior: a meta-analytic review. *Clin Psychol Rev* 2000; 20: 561-592.
- 4) Maccoby EE. Parenting and its effects on children: On reading and misreading behavior genetics. *Annu Rev Psychol* 2000; 51: 1-27.
- 5) Luthar SS, Cicchetti D, Becker B. The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future work. *Child Dev* 2000; 71: 543-562.
- 6) Walsh F. The concept of family resilience: Crisis and challenge. *Fam Process* 1996; 35: 261-281.
- 7) Hawley DR, DeHaan L. Toward a definition of family resilience: Integrating life-span and family perspectives. *Fam Process* 1996; 35: 283-298.
- 8) Bayat M. Evidence of resilience in families of children with autism. *J Intellect Disabil Res* 2007; 51: 702-714.
- 9) Hastings RP. Child behaviour problems and partner mental health as correlates of stress in mothers and fathers of children with autism. *J Intellect Disabil Res* 2003; 47: 231-237.
- 10) Suzuki K, Kobayashi T, Moriyama K, Kaga M, Inagaki M. A framework for resilience research in parents of children with developmental disorders. *Asian Journal of Human Services* 2013; 5: 104-111.
- 11) 木下康仁. ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッドセオリーアプローチのすべて. 東京・埼玉: 弘文堂. 2007.
- 12) 木下康仁. グラウンデッド・セオリー・アプローチ: 質的実証研究の再生. 東京・埼玉: 弘文堂. 1999.
- 13) Eriksson E, Lauri S. Informational and emotional support for cancer patients' relatives. *Eur J Cancer Care* 2000; 9: 8-15.
- 14) 佐藤琢志, 祐宗省三. レジリエンス尺度の標準化の試み—『SH 式レジリエンス検査 (パート 1)』の作成および信頼性・妥当性の検討 (看護に活用するレジリエンスの概念と研究). *看護研究* 2009; 第 42 巻: pp. 45-52.
- 15) Antonovsky A, 著, 山崎喜比古, 吉井清子監訳. 健康の謎を解く ストレス対処と健康保持のメカニズム. 東京: 有信堂, 2001.
- 16) 中田洋二郎. 子どもの障害をどう受容するか: 家族支援と援助者の役割. 東京: 大月書店, 2002.

17) Olshansky, S. Chronic sorrow: A Response to having mentally defective children. *Social Casework* 1962; 43: 190-193.

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Suzuki K, Kobayashi T, Moriyama K, Kaga M, Inagaki M. A framework for resilience research in parents of children with developmental disorders. *Asian Journal of Human Services* 2013; 5: 104-111.
- 2) 鈴木浩太, 北 洋輔, 加我牧子, 三砂ちづる, 竹原健二, 稲垣真澄. 子どもの行動特性と母親の抑うつ傾向の関連性: 母性意識の効果について. *小児保健研究* 2013 ; 第 5 卷, pp. 363-368.
- 3) 稲垣真澄, 小林朋佳, 安村 明. ADHD

や自閉症の評価方法. *小児科診療* 2013 ; 第 76 卷, pp. 369-374.

2. 学会発表

- 1) 小林朋佳, 稲垣真澄, 鈴木浩太, 森山花鈴, 加我牧子: 発達障害診療に必要な保護者支援に関する調査: 医師と保護者の特性に関する検討. 第55回日本小児神経学会学術集会, 大分, 2013.5.30-6.1.
- 2) 鈴木浩太, 北 洋輔, 加我牧子, 三砂ちづる, 竹原健二, 稲垣真澄: 7歳6ヶ月から9歳の子どもの行動特性の発達的变化に母親の療育行動が及ぼす影響. 第55回日本小児神経学会学術集会, 大分, 2013.5.30-6.1.

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得           なし
2. 実用新案登録   なし
3. その他            なし